

過疎地域と寺院のあり方に関する総合的研究 —揖斐川町春日地区における真宗寺院を中心として—(要約)

木越康（研究代表者） 東館紹見 山下憲昭 本林靖久

本論考は、大谷大学真宗総合研究所における特定研究「新しい時代における寺院のあり方研究」班の3か年にわたる調査・研究の成果としてまとめられたものである。この研究班は、日本社会における全国的な少子高齢化、人口の都市集中と地方における過疎の進展、地域の構成員相互における関係性の稀薄化といった深刻な諸状況のもと、地域社会におけるコミュニティの維持が困難となっている厳しい状況を踏まえて、各地域と密接に関係しつつ活動してきた寺院の存在に注目し、様々な問題を抱える現代社会において寺院の果たし得る役割を総合的に調査・研究し、その成果の公開を目的として活動を始めた。

上記の研究に取り組んできたことの総括として本論考では、(1) 調査対象地域である岐阜県揖斐郡揖斐川町春日地区の置かれた地域としての現状・課題について地域社会福祉の視点から、(2) 本地区において特徴的にみられる葬制・墓制のあり方について宗教人類学・民俗学的視点から、(3) 本地区の寺院や人々の信仰のあり方から見えてくる現代の仏教界と地域社会の実態との間の認識のズレなどの問題について宗教学的視点から、それぞれまとめと課題の提起を行った。

まず(1)では「揖斐川町春日地域の変化と人びとの「まとまり」」として、「寺院と地域」研究の前提となる春日地区の人口動態や暮らしを守っていく営みについて整理し論じている。

春日地区の人口は最盛期には4,000人を超える規模であったが、現在では900人にまで減少しており、転出による「社会的減」とともに近年「自然減」の割合も急速に大きくなっている。同地区の高齢化率は50%を上回っており、

*編集委員会注 本稿は要旨である。全文は大谷大学学術情報リポジトリ (<https://otani.repo.nii.ac.jp/>) に掲載。

2025年ころからは高齢者の実人数が減っていくが、それ以上の割合で生産年齢人口、年少人口が減っていくものとみられる。人口動態だけをみると地域的な人口構成は厳しいといわざるを得ない実態が浮かび上がる。また、地域事情についても、同地区は通勤・買い物・通学などの困難が存在し、高齢者のみの世帯が増えている現状から、生活上の困難が大きくなることは避けられない。それ故、住民の交流や福祉の拠点となる施設の重要性が一層増す状況にある。

他方、春日地区からの転出先は、行き来が可能な旧揖斐川町、池田町、大野町、大垣市、岐阜市など近隣市町が多い。それ故人口減少と高齢化がすすみ、先行きがみえにくい状況ではあるが、近接地域に居住する他出子は、春日地域の隠れた体力、底力となることが可能である。「他出子」を手がかりとして人々の交流のあり方を検討できれば、人口統計の厳しさとらわれ過ぎず、地域のあり方を提案する可能性がありうる。また、春日地域における「強み」として、伝統に基づく信仰と人びとの繋がりの強さが現存している。寺院は、他出門徒も含め、「まとまり」を呼びかけ、生活情報や福祉情報、生活関連施策などとの「橋渡し役」といった役割を発揮し、暮らしの安心と心豊かに過ごしていけるような関係を紡ぎ出していくことが今後の重要な課題となるのではないであろうか。

(2)では「〔無墓制〕にみる真宗寺院と門徒の関係をめぐって」という点から春日地区の調査をもとに、真宗地域の墓制の特徴とそこから見える真宗寺院の課題を宗教人類学的な視点で論じている。ここでは、春日地区の墓制、特に上ヶ流地区、下ヶ流地区、香六地区に見られる無墓制の現状を詳しく論じながら、他の真宗地域の無墓制の検証を踏まえて、無墓制から見えてくる真宗寺院の現状と課題に関して、次のように論じられている。

無墓制を持続させてきた背景を踏まえると、門徒が墓を持たない理由は、本山(手次寺)への納骨儀礼とともに、仏壇や寺院の本堂(本尊)に対する信仰と、無墓制を成り立たせるための村落共同体の持続可能な制度が住職によって形成されていたことによると考えられる。無墓制とは、火葬の場合は、地区内の火葬地において遺骨を放置し、一部の遺骨のみを本山(手次寺)に納骨し、石塔を建立しない習俗を指している。そこでは、門徒の遺骨を納める行為と本山の遺骨を受け取る行為が存在するなかで、遺骨は現世と来世(浄土)との交流を約束する交換関係の象徴として意識されていたように思われる。そのうえで、

真宗門徒の無墓制の習俗は、基本的には阿弥陀信仰(真宗信仰)、開山信仰(祖師崇拜)、民俗信仰(祖先崇拜)の三項図式で提示することができる。こうした三項図式で提示する信仰は、真宗寺院(住職)と門徒の様々な行事の継続のなかで成り立っており、春日地区においても報恩講や永代経などの寺院の年中行事、真宗大谷派8ヶ寺が輪番で行う五日講、あるいは、門徒の葬儀や法事などの場で、門徒が共有する宗教世界観を持ちながら生活してきたと言える。

しかし、こうした寺院と門徒との関係に近年変化が生じている。聞きとり内容から門徒にとって手次寺との関係が疎遠になっている様子や昭和後期に建立された墓がすでに無縁墓になっている事例、他出門徒のなかには墓を居住近くに移転したり墓じまいしたりする門徒の存在が確かめられる。このような現況のなか、寺院側に納骨堂や永代供養墓の建立といった方法で、門信徒を引き留めようとする動きはあるが、大きな効果は現れていないようである。

寺檀制度に支えられてきた真宗寺院と門徒との関係は、門徒にとって家の宗教としての先祖供養を寺院に委ねてきたが、すでに三項図式で提示した信仰そのものが、門徒の宗教生活のなかで存在しているのかが問われる状況であり、真宗の教えのなかで、真宗寺院(住職)が門徒とどのような関係性を築いていくことができるのか、模索する状況が続いている。

(3)では、この研究班が立ち上げられたきっかけと問題意識および3年間の調査研究を踏まえた本研究の現状と課題が宗教学的視点から述べられている。ここでは本研究の現状と課題、今後に向けての概要を記す。

本研究班が開始された当初は、寺院が地域のソーシャルキャピタルの核として、住民たちの「つながり」を回復する新たな機能をはたす方策を、僅かでも提示できるのではないかと考えていた。ところが3年を経た今、過疎を巡る地域の問題は複雑に絡み合い、容易に解決策を提示できる状態にないことが明らかとなった。春日地区の調査研究から見てきた具体的な問題点は、次の5点である。

- ①各地域や寺院が抱える問題的状况はそれぞれに個別であって、一つの解決案が必ずしも他の地域の対策案とはならない。
- ②地域を離れた世帯、言わば他出子調査も必要となり、聞き取りが実は広範囲に及ぶ。
- ③地域住民と寺院(寺族)の間に、寺院存続という基本事項に関する考え方の

齟齬がある。

④本山を核とする教団側と地域住民との間の宗教的要求の間にズレがある。

⑤地域は住民だけではなく、「ご先祖さま」を含めた「生者と死者とが交錯する場」としてある。

特に本論文では④と⑤について具体的な事例を含め詳しく論じているが、その内容は完全原稿にて確認いただきたい。ここでは「地域のための寺院のあり方研究」という視点から浮き彫りにされた課題を述べておく。

江戸期の真宗教団までさかのぼると、本山での教学研鑽の結果がそのまま地域の人々の信仰となったのではなく、民間主導の「講」活動が、真宗的信仰の醸成に大きな役割を果たしたことが知られる。そこでは地域住民の自発的な学びが教義と相俟って、各信仰を涵養しており、先祖供養をどう考えるのか、滅後の行方への不安など、それぞれの疑問の中で教えが学ばれ、真宗特有の信仰が醸成されてきた。戦後、大谷派教団は「家の宗教から個の自覚へ」をスローガンとしており、過疎対策にも臨んでいるが、「地域住民のため」であろうとするならば「家の宗教」の中で育まれてきた宗教感情にまずは留意すべきではないだろうか。「家の宗教」と呼ばれた宗教的風土は、地域や先祖とのつながりの中で醸成された「地域と住民の身体に染み込んだ宗教感情」だと言える。従来、このような宗教的風土の中で、住民たちは「どこから来て、どこへ行くのか」という「生と死」に関わる人間の根本問題に、ひとつの意味を与えられてきたと考えられる。

一方、従来研究者から指摘される、教えの発信者であろうとする教団側と教えの受信者とされる民衆との間に存在する齟齬を踏まえて考えるなら、「地域のための寺院のあり方研究」において現状の大きな問題点として問われねばならないのは、そもそも寺院は地域のためにあるのか、地域が教団（教化）のためにあるのかということであろう。この点を踏まえつつ、今後より一層地域住民と地域寺院の声に注目し、発信者と受信者が「うまくリンク」できる接合点を見出していかなければならないと考える。

以上が、本論に論述された「まとめと課題の提起」の概要である。3か年間の調査を経て再認識させられたのは、今後取り組むべき課題の大きさ、深刻さと、見えていなかった地域と寺院の内実、背景の広大さである。そうだからこそ、人口減少等による複雑かつ困難な諸状況に直面する中で、他出者、地域以

外の居住者をも含めた多くの人々によって支えられ、現に地道な活動を続ける、各地・各寺院の活動の具体相に注目し分け入っていく調査研究が一層重要さを増すと考える。このような研究活動の継続によって、私たちは今まで目の当たりにしつつもその意義を十分に評価してこなかった地域社会と寺院の、人々が真に支えようとしている豊かなあり方に接することが可能となるであろう。